

省略文に課せられる制限に関する考察： LF コピーと PF 削除による派生の観点から*

島 越 郎

1. はじめに

英語には、次に示す省略文が存在する（下線部が省略箇所を示す）。

- (1) a. John loves Mary, and Tom does _ too.
 b. John loves Mary, but he does not _ Jane.
 c. John loves Mary and Tom _ Jane.

(1a) は助動詞 *does* の後で動詞句 *love Mary* が省略されている動詞句省略 (VP-ellipsis), (1b) は否定語 *not* の後で原形動詞 *love* が省略されている擬似空所化 (Pseudogapping), (1c) は主語 *Tom* と目的語 *Jane* の間に時制を伴う動詞 *loves* が省略されている空所化 (Gapping) の例である。これらの省略文は自由に許されるわけではなく、生起する環境、省略箇所と先行詞との位置関係、そして、取り得る先行詞の三つの点で制限を受ける。本稿では、(1) の省略の適用に課せられる制限が、これら省略文の派生の違いとして説明されることを主張する。

本稿の構成は次である。次節では、動詞句省略文を音声解釈部門 (PF) における削除操作により派生させ、他方、擬似空所化と空所化を意味解釈部門 (LF) におけるコピー操作により派生させる分析を提案する。3 節では、提案された省略文の分析から、(1) の省略文に課せられる制限が導き出せることを論じる。4 節では、空所化とその他の省略に課せられる制限の違いについて説明を試みている Johnson (2009) の分析を批判検討する。5 節はまとめとなる。

2. LF コピーと PF 削除による省略文の分析

著者は、島 (2010) において、PF における削除操作と LF におけるコピー操作を引き起こす形式素性として (2) を提案した。

- (2) a. Copy 素性 (C-F) を持つ主要部の補部と指定部には、空所と音形を持つ要素がそれぞれ選択され、LF で空所に先行詞がコピーされる。
- b. Deletion 素性 (D-F) を持つ主要部の最大投射は PF で削除される。

提案 (2a) の C-F を持つ語彙要素により選択された空所スロットには、完全解釈 (Full Interpretation) の要請により適切な構造が LF でコピーされる。一方、(2b) の D-F を持つ語彙要素 X は、D-F がその最大投射 XP まで浸透した結果、XP が PF で削除される。また、C-F と D-F の生起条件として (3) を提案した。

- (3) C-F と D-F は、フェーズである CP と vP の主要部に随意的に基底生成される。

Chomsky (2000, 2001) が提案するフェーズ理論によると、統語構造は CP と vP のフェーズ単位に構築される。(3) は、省略文もフェーズである CP と vP 単位に構築されることを意味する。

以上の点を仮定し、動詞句省略文の派生を考えてみよう。D-F が vP 主要部に基底生成された場合、(1a) は次の構造を持つ。(角括弧の部分が省略箇所を表す。)

- (4) John loves Mary, and [_{TP} Tom₁ does [_{vP} t_i v <D-F> [_{vP} love Mary]]] too.

この構造では、Tom が vP 指定部から TP 指定部に移動した後で音声化 (Spell-Out) が適用し、D-F を持つ v の最大投射 vP が PF で削除される。(4) は、いかなる条件・制約にも違反しない合法的派生である。

一方、v が C-F を持つ場合、(1a) の構造は次である。

(5) John loves Mary, and [_{TP} Tom₁ does [_{vP} t₁ v<C-F> [e]]] too.

この構造では、C-F を持つ v の指定部を音形を持たない Tom の痕跡が占める。その結果、(2a) の C-F の特性が満たされず、(5) は許されない。従って、動詞句省略文は、vP 主要部の D-F が誘発する PF 削除操作により派生される。

次に、(1b) の擬似空所化の派生を考えてみよう。C-F が vP 主要部に基底生成された場合、(1b) は次の構造を持つ。

(6) John loves Mary, but [_{TP} he₁ does not [_{vP} t₁ [_{v'} Jane [_{v'} v<C-F> [e]]]]]

この構造では、C-F を持つ v が補部に空所スロットを選択している。また、vP 指定部には he と Jane が基底生成され、上位の指定部の he が TP 指定部に移動する。(6) に音声化が適用され、PF では C-F が vP 指定部に存在する Jane に接辞化する。その結果、(2a) の C-F の認可条件は満たされる。他方、LF においては空所スロットに先行詞文の要素がコピーされる。(6) では、Mary と Jane が対比の関係にあり、両者は焦点化されている。焦点化された要素はコピーされる際に変項に置き換えられると仮定しよう。この仮定によると、(6) から次の LF 構造が派生する。

(7) John [_{vP} loves Mary], but [_{TP} he₁ does not [_{vP} t₁ [_{v'} Jane [_{v'} v<C-F> [love x]]]]]

この構造において、コピーされた要素内の変項が Jane に束縛される。この派生は、いかなる条件・制約にも違反しない合法的派生である。

一方、v が D-F を持つ場合、(1b) は次の構造を持つ。

(8) John loves Mary, but [_{TP} he₁ does not [_{vP} t₁ [_{v'} Jane₂ [_{v'} v<D-F> [_{vP} loves t₂]]]]] too.

この構造では、目的語の Jane が vP 指定部に移動した後で、D-F を持つ v の最大投射 vP が削除される。しかし、削除された Jane と同一要素が先行文に存在しないため、この削除は復元可能性条件に違反する。従って、擬似空所化は、vP 主要部の C-F が誘発

(30) 省略文に課せられる制限に関する考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から (島)

する LF コピー操作により派生される。

同様に、(1c) の空所化も LF コピー操作により派生する。まずは、C-F が C に基底生成される場合を考えてみよう。

(9) [_{&P} [_{CP1} [_{TP} John loves Mary]]] and [_{CP2} Tom [_C Jane [_C C<C-F> [e]]]]]

この構造では、等位接続詞 and が CP1 と CP2 を連結し、第二等位項における CP 主要部に C-F が存在する。C-F が補部に空所スロットを選択し、CP 指定部には Tom と Jane が基底生成されている。(9) に音声化が適用し、PF において C-F が CP 指定部に存在する Jane に接辞化することにより、(2a) に示す C-F の認可条件は満たされる。また、John と Tom, Mary と Jane がそれぞれ対比されており、これらの要素全てが焦点化されている。その結果、空所スロットにコピーされる際に第一等位項における John と Mary が変項に置き換えられ、次の LF 構造が派生する。

(10) [_{&P} [_{CP1} [_{TP} John loves Mary]]] and [_{CP2} Tom [_C Jane [_C C<C-F> [x loves y]]]]]

この構造において、コピーされた要素内の二つの変項 x と y が Tom と Jane からそれぞれ束縛される。

次に、C-F が v に基底生成される場合を考えてみよう。

(11) [_{TP} John₁ [_{&P} [_{vP1} t₁ v [_{vP} loves Mary]]] and [_{vP2} Tom [_v Jane [_v v<C-F> [e]]]]]

この構造では、and が vP1 と vP2 を連結し、and の第二等位項である vP2 の主要部に C-F が存在する。第一等位項である vP1 内の John が TP 指定部に移動する。この移動は項位置への移動であり、下接の条件の一部である等位構造制約には従わないと仮定する。他方、第二等位項内の C-F が空所スロットを補部に選択している。この構造に音声化が適用され、PF では C-F が vP 内の Jane に接辞化することにより、(2a) に示す C-F の認可条件は満たされる。更に、空所にコピーされる際に、Jane と対比の関係にあ

り焦点化されている Mary が変項に置き換えられ、次の構造が派生する。

- (12) [_{TP} John₁ [_{&P} [_{vP1} t₁ v [_{VP} loves Mary]]] and [_{vP2} Tom [_v Jane [_v v<C-F> [love x]]]]]]

この構造において、コピーされた要素内の変項 x が Jane により束縛される。また、第一等位項の主語 John と第二等位項の主語の Tom は、基底生成された vP 指定部において T より主格が付与される。その結果、この派生は、いかなる条件・制約にも違反しない合法的派生である。

このように、空所化は LF コピー操作により派生するが、PF 削除操作により派生させることはできない。PF 削除操作を誘発する D-F が v あるいは C に基底生成された場合、(1c) はそれぞれ (13a,b) の構造を持つ。

- (13) a.* ... and [_{vP} Tom [_v Jane₂ [_v v<D-F> [_{VP} loves t₂]]]]]
 b.* ... and [_{CP} Tom₂ [_C Jane₃ [_C C<D-F> [_{TP} t₂ [_{vP} t₂ v [_{VP} loves t₃]]]]]]]]]

これらの構造において、D-F を持つ最大投射、すなわち、(13a) では vP、(13b) では CP がそれぞれ削除される。しかし、削除される Tom と Jane に対応する要素が先行文中には存在せず、この削除操作は復元可能性条件に違反する。従って、空所化は、CP 主要部と vP 主要部の C-F が誘発する LF コピー操作により派生される。

以上、本節では、LF コピーと PF 削除を引き起こす素性として (2) を仮定し、動詞句省略文が PF 削除により派生し、また、擬似空所化文と空所化文が LF コピーにより派生する分析をみてきた。次節では、このような分析の下で、省略の適用に課せられる三つの制限が統一的に説明されることを論じる。

3. 省略文に課せられる三つの制限

3.1. 従属節における適用

動詞句省略文は従属節に生起できる。

(32) 省略文に課せられる制限に関する考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から (島)

- (14) a. John will eat an apple and Tom says that Mary will too.
b. John will eat an apple because Mary will.

本論の分析によると、(14) の動詞句省略文は次の構造を持つ。

- (15) a. … and Tom said that Mary₁ will [_{vP} t_i v <D-F> [_{vP} eat an apple]] too.
b. … because Mary₁ will [_{vP} t_i v <D-F> [_{vP} eat an apple]]-.

これらの構造では、埋め込み節内の vP 主要部に D-F が存在し、最大投射である vP 全体が PF において削除される。(15) の構造はいかなる条件にも違反しない。そのため、(14) の動詞句省略文は許される。

次に、擬似空所化文と空所化文について見てみよう。擬似空所化文は従属節に生起できるが、空所化文はできない。(Jackendoff (1971), Koutsouodas (1971), Hudson (1976) and Hankamer (1979))。

- (16) a. Some had eaten mussels because others had shrimp.
b.* Some had eaten mussels because others shrimp.
(17) a. Some had eaten mussels and she claims that others had shrimp.
b.* Some had eaten mussels and she claims that others shrimp.

(Johnson (2009 : 293))

先ずは、擬似空所化文の (16a) と (17a) を考えてみよう。本論の分析によると、これらの文は次の構造を持つ。

- (18) a. Some had eaten mussels because [_{TP} others₁ had [_{vP} t₁ [_v shrimp v <C-F> [e]]]]
b. Some had eaten mussels and she claims that [_{TP} others₁ had [_{vP} t₁ [_v shrimp v <C-F> [e]]]]

これらの構造においては、残留要素の shrimp と対比の関係にある mussels を変項 x に

置き換えた eaten x が空所スロットにコピーされる。

- (19) a. Some had eaten mussels because [_{TP} others₁ had [_{vP} t₁ [_{v'} shrimp v<C-F> [eaten x]]]]]]]]
 b. Some had eaten mussels and she claims that [_{TP} others₁ had [_{vP} t₁ [_{v'} shrimp v<C-F> [eaten x]]]]]]]]

この派生は合法的であり, (16a) と (17a) の擬似空所化文は許される。

次に, (16b) と (17b) の空所化文を考えてみよう。本論の分析の下では, これらは次の二つの構造を持つ。

- (20) a. Some had eaten mussels because [_{CP} others [_{C'} shrimp C<C-F> [e]]]]]
 b. Some had eaten mussels and she claims that [_{CP} others [_{C'} shrimp C<C-F> [e]]]]]
 (21) a. Some had eaten mussels because [_{vP} others [_{v'} shrimp v<C-F> [e]]]]]
 b. Some had eaten mussels and she claims that [_{vP} others [_{v'} shrimp v<C-F> [e]]]]]

構造 (20) では空所スロットを選択する C-F が CP 主要部に生起し, (21) では vP 主要部に生起する。これらの構造では, 従属接続詞 because と補文標識 that の選択関係が満たされていない。すなわち, 従属接続詞と補文標識は補部に TP を選択するが, これらの補部には CP と vP が生起している。その結果, これらの構造は許されず, (16b) と (17b) は非文である。¹

尚, 空所化は比較節においても適用される。

- (22) a. Robin speaks French better than Leslie, German.
 b.? Robin thinks that it is harder to speak French than Leslie, German.
 c.? Robin thinks that it is more fun to speak French than Leslie, German.
 d. Robin tried harder to learn French than Leslie, German.
 e. Robin no more speaks French than Leslie, German.

(34) 省略文に課せられる制限に関する考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から (島)

(Culicover and Jackendoff (2005 : 278))

これらの文は、比較を表す *than* がその補部に CP を選択すると仮定することにより説明できる。この仮定によると、(22a) は次の構造を持つ。

(23) Robin speaks French better than [_{CP} Leslie [_C German C<C-F> [e]]]

この構造では、Leslie と German が Robin と French とそれぞれ対比の関係にある。その結果、Robin と French を変項に置き換えた *x speaks y* が空所スロットにコピーされ、(22a) の空所化文は許される。

最後に、省略箇所が関係詞節内に生起する場合を見てみよう。

(24) The man who likes meat met [_{DP} the woman who doesn't _].

(Lobeck (1995 : 25))

(25)* The man who likes meat met [_{DP} the woman who _ fish].

(26) a.* Robin won't fascinate the children, but I believe [_{DP} the claim that she will the adults].

b.* Robin can't speak French, but she has [_{DP} a friend who can _ Italian].

(Agbayani and Zoerner (2004 : 207))

文 (24) が示すように動詞句省略は複合名詞制約を形成する関係詞節内で適用できるが、(25) と (26) が示すように空所化と擬似空所化は適用できない。関係詞節の繰り上げ分析を仮定すると、(24) は次の構造を持つ。

(27) ... [_{DP} the [_{CP} woman₁ [_C who [_{TP} t'₁ doesn't [_{vP} t_x [_v V<D-F> [_{vP} like meat]]]]]]]]

この構造では、定冠詞 *the* が補部に CP を選択し、その主要部に *who* が生起する。また、*woman* は基底生成された *vP* 指定部から *TP* 指定部を經由し *CP* 指定部へ移動している。*vP* 主要部の *D-F* により *vP* 全体が削除されるが、この構造はいかなる条件にも違反し

ない。そのため、(24) の動詞句省略文は許される。

他方、(25) の構造は次である。

- (28) The man who likes meat met [_{DP} the [_{CP} woman [_C· who [_C· fish [_C· C<C-F> [e]]]]]]]

この構造では、定冠詞 the の補部に選択された CP の主要部に C-F が生起する。また、CP 指定部には woman, who, fish が生起する。これら残量要素の内、woman と fish を先行詞文内の man と meat にそれぞれ対させることにより、先行詞文から空所スロットにコピーされる x likes y が形成される。

- (29) The man who likes meat met [_{DP} the [_{CP} woman [_C· who [_C· fish [_C· C<C-F> [x likes y]]]]]]]

この構造では、コピーされた要素内の変項 x と y は woman と fish にそれぞれ対応するが、who に対応する変項が存在しない。そのため、(29) の構造は許されず、(25) の空所化文は非文となる。

また、(26) の擬似空所化文は次の構造を持つ。

- (30) a. Robin won't fascinate the children, but I believe the claim that she₁ will [_{VP} t₁ [_V· the adult [_V· v<C-F> [e]]]]]
 b. Robin can't speak French, but she has a friend [_{CP} who₁ [_{TP} t'₁ can [_{VP} t₁ [_V· Italian [_V· v<C-F> [e]]]]]]]

これらの構造において、空所スロットにコピーされる要素を形成するためには、残留要素に対応する要素を先行詞内から選び出さなければならない。しかしながら、(30) では、残留要素が関係詞節内に埋め込まれているため、対応する要素の対比されにくい。そのため、(26) の擬似空所化文は許されない。

尚、残留要素とそれに対応する先行詞文内の要素との対比関係が明確になれば、関係詞節内においても擬似空所化文の容認度が高まると予測されるが、この予測は正しい。

次の文を見てみよう。

- (31) a.?? I believe the claim that Robin won't fascinate the children, but I don't believe the claim that she will _ the adults.
b.?? Robin has a friend who can speak French, but she doesn't have a friend who can _ Italian. (Agbayani and Zoerner (2004 : 208, note 18))

これらの文では、等位接続詞 *but* で連結された二つの文が対比の関係にあり、擬似空所化による残留要素とそれに対応する先行詞文内の要素との対応関係が明確である。従って、(26) と (31) は共に関係詞節内に擬似空所化が生起する文であるが、(31) の方が (26) よりも容認度が高くなると考えられる。²

3.2. 後方照応制約

次に、省略箇所と先行詞との位置関係について考えてみよう。両者の位置関係に関する制約に後方照応制約と呼ばれるものがある。この制約によると、省略文が先行詞文に先行できるのは、省略文が従属節内に生起する場合に限られる。動詞句省略はこの後方照応制約に従う。

- (32) a. After Bill did _ , John tried LSD.
b.* John did _ after Bill tried LSD. (Sag (1976 : 341))

文 (32a) における従属節内に生起する省略文は先行詞文に先行できるが、(32b) における主節内の省略文は先行詞文に先行できない。他方、空所化と擬似空所化は後方照応制約に従わず、従属節内の省略文でも先行詞文に先行できない。

- (33) * Because Sue _ meat, John ate fish. (Lobeck (1995 : 22))
(34) * Because John didn't _ Clinton, Mary interviewed Gingrich. (Lasnik (1999 : 202))

このような後方照応制約効果は、代名詞と先行詞の関係においても見られる。

- (35) a. After he₁ tried LSD, John₁ dropped out.
 b.* He₁ dropped out after John₁ tried LSD. (Sag (1976 : 341))

代名詞と省略文は共に代用表現であるため、(32a,b)の対比は動詞句省略文固有の特徴ではなく、代用表現一般の特徴を示している。空所化文と擬似空所化文も代用表現であるため、(33)の空所化文と(34)の擬似空所化文が何故許されないのかを説明しなければならない。(33)の非文の理由は、前節でも見たように、従属接続詞 *because* の選択関係が満たされないためである。本論の分析によると、空所化の残留要素である *Sue* と *meat* は CP もしくは vP 指定部に存在するが、CP も vP も TP を選択する *because* の補部には生起できない。従って、(33)の空所化文は許されない。

また、(34)の擬似空所化文は派生の段階で次の構造を持つ。

- (36) Because John₁ didn't [_{vP} t₁ [_{v'} Clinton [_{v'} v<C-F> [e]]]] , Mary interviewed Gingrich.

この構造において、空所スロットにコピーされる要素を形成するためには、残留要素である *Clinton* が先行詞文内の *Gingrich* と対比されなければならない。しかし、従属節内の目的語とそれに後続する主節内の目的語は対比されにくい。

- (37) a. Fred likes eggplants, although he likes RUTABAGAS too.
 b.# Although he likes RUTABAGAS too, Fred likes eggplants.
 (Johnson (2001 : 463))

従って、(36)においても *Clinton* と *Gingrich* は対比されにくく、*Gingrich* を変項 *x* に置き換えた *interview x* を得ることができない。その結果、(34a)の擬似空所化文は許されない。

3.3. 動詞と that 節を含む省略

最後に、省略箇所に対応する先行詞の範囲について見てみよう。

(38) 省略文に課せられる制限に関する考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から (島)

- (38) a. Max claimed that he gave Lucy flowers before John did.
b. Max claimed that he gave Lucy flowers before John did chocolates.

(Lappin (1996 : 152))

動詞句省略文 (38a) は多義的であり, John gave Lucy flowers の解釈と, John claimed that he gave Lucy の解釈がある。他方, (38b) の擬似空所化文は, John gave Lucy chocolates とは解釈できるが, John claimed that he gave Lucy chocolates とは解釈できない。また, 次の文を見てみよう。

- (39) a.* The first letter will say that you should pay tax and the second one will V.A.T.
b.* The first letter₁ will say that you should pay tax, but it₁ will not V.A.T.
c. The first letter will say that you should pay tax and the second one V.A.T.

二人のインフォーマントの判断によると, (39a,b) の擬似空所化文における省略箇所は say that you should pay として解釈できないが, (39c) の空所化文における省略箇所はそのような解釈が可能である。このように, 動詞句省略と空所化は目的語の that 節を含む複文を先行詞に取ることができるが, 擬似空所化はできない。

尚, Neijt (1979 : 142) は (39c) を非文としているが, 談話状況を整えることにより, 複雑な解釈を要求する空所化文の容認可能性が高まることが報告されている (Kuno (1976 : 308, note 15))。例えば, 次の用例を見てみよう。

- (40) a. What did each man each claim that hedgehogs eat?
b. Harry claimed that hedgehogs eat mushrooms and Barry _ frogs.

(Steedman (1990 : 248))

- (41) a. Everybody₁ said he₁'d bring something different to the portluck.
b. Jack₁ said that he₁'d bring wine, Bob beer, and Sam _ whisky.

(Merchant (2001 : 113))

文 (40) と (41) では, それぞれ (a) の発話の後に, 空所化を含む (b) の発話が続く。(40b) の空所箇所は claimed that hedgehogs eat と解釈され, また, (41b) の空所箇所は

say that he'd bring と解釈される。

動詞句省略, 空所化, 擬似空所化に見られるこの違いは, 本論の分析により説明できる。まずは, (38a) について見てみよう。本論の分析によると, この文は次の二つの構造を持つ。

- (42) a. Max claimed that he gave Lucy flowers before [TP John₁ did [_{VP} t_i [_{V'} v<D-F> [_{VP} give Lucy flowers]]]]]
 b. Max claimed that he gave Lucy flowers before [TP John₁ did [_{VP} t_i [_{V'} v<D-F> [_{VP} claim that he gave Lucy flowers]]]]]

これら二つの構造は共に合法的であり, (38a) の多義性が保証される。

他方, (38b) は派生の段階で次の構造を持つ。

- (43) Max claimed that he gave Lucy flowers before [TP John₁ did [_{VP} t_i [_{V'} chocolates [_{V'} v<C-F> [e]]]]]]]

この構造において, 残留要素 chocolates と対比の関係あるのは, 先行詞文内の flowers である。flowers を変項 x に置き換えた give Lucy x が空所スロットにコピーされた場合, 次の構造が派生する。

- (44) Max claimed that he gave Lucy flowers before [TP John₁ did [_{VP} t_i [_{V'} chocolates [_{V'} v<C-F> [give Lucy x]]]]]]]

この構造では, chocolates と give Lucy x が C-F を持つ vP 主要部を通じて局所的関係にある。そのため, chocolates が give の項であることが保証される。

また, (43) の空所に claim that he gave Lucy x がコピーされた場合, 次の構造が派生する。

- (45) Max claimed that he gave Lucy flowers before [TP John₁ did [_{VP} t_i [_{V'} chocolates [_{V'} v<C-F> [claim that he gave Lucy x]]]]]]]

この構造では、C-F を持つ vP 主要部を通じて局所的関係にあるのは、chocolates と claim that he gave Lucy x である。その結果、chocolates を意味選択する動詞が give ではなく claim になり、(45) は正しく解釈されない。従って、(44) のみ適確な構造となり、(38b) の省略文は John gave Lucy chocolates としてのみ解釈される。

擬似空所化文 (39a,b) の非文の理由も同様に説明できる。これらの文は、次の構造を持つ。

- (46) a. The first letter will say that you should pay tax and [_{TP} the second one will [_{vP} t₁ [_v V.A.T [_v v<C-F> [e]]]]]
- b. The first letter₁ will say that you should pay tax, but [_{TP} it₁ will not [_{vP} t₁ [_v V.A.T [_v v<C-F> [e]]]]]

これらの構造においては、V.A.T と tax が対比される以外に、(46a) では the first letter と the second one, また、(46b) では will と will not が対比される。その結果、空所スロットには、先行詞文内の that 節を含む主節の動詞句がコピーされる。

- (47) a. The first letter will say that you should pay tax and [_{TP} the second one will [_{vP} t₁ [_v V.A.T [_v v<C-F> [say that you should pay x]]]]]
- b. The first letter₁ will say that you should pay tax, but [_{TP} it₁ will not [_{vP} t₁ [_v V.A.T [_v v<C-F> [say that you should pay x]]]]]

これらの構造は、(45) と同様に不適格である。なぜなら、V.A.T と局所的な関係にある動詞は、埋め込み節の動詞 pay ではなく、主節動詞 say であり、V.A.T は pay の目的語としては認可されないためである。

他方、(39c) の空所化文は次の二つの構造を持つ。

- (48) a. The first letter will say that you should pay tax and [_{CP} the second one [_C V.A.T [_C C<C-F> [e]]]]]
- b. The first letter will say that you should pay tax and [_{vP} the second one [_v V.A.T [_v v<C-F> [e]]]]]

構造 (48a) では C-F が CP 主要部に, (48b) では vP 主要部に生起している。どちらの構造においても, the first letter と the second one, また, tax と V.A.T が対比されていることにより, that 節を含む複文が空所スロットにコピーされる。但し, コピーされる部分が異なる。(48a) では, 主節の主語 the first letter と埋め込み節の目的語 tax をそれぞれ変項 x と y に置き換えた x will say that you should pay y がコピーされる。一方, (48b) では, 埋め込み節の目的語 tax を変項 x に置き換えた say that you should pay x がコピーされる。

- (49) a. [_{TP} The first letter will say that you should pay tax] and [_{CP} the second one [_C V.A.T [_C C<C-F> [x say that you should pay y]]]]
- b. The first letter will [_{VP} say that you should pay tax] and [_{VP} the second one [_v V.A.T [_v v<C-F> [say that you should pay x]]]]

構造 (49b) は, (45) と同様に不適格である。しかしながら, (49a) では, V.A.T が CP 指定部に生起しているため, 主節動詞 say ではなく, 埋め込み節の動詞 pay の目的語として見なされる。その結果, (49a) は適確な構造であり, この構造を持つ (39c) の空所化文は文法的である。

3.4. まとめ

以上, 本節では, 生起する環境, 省略箇所と先行詞との位置関係, そして, 取り得る先行詞の三つの点で動詞句省略, 擬似空所化, 空所化の適用が制限されるという事実が, これらの省略文の派生の観点から統一的に説明できることを見てきた。次節では, 空所化文に課せられる制限とその他の省略文に課せられる制限の違いについて説明を試みている Johnson (2009) の分析を批判検討する。

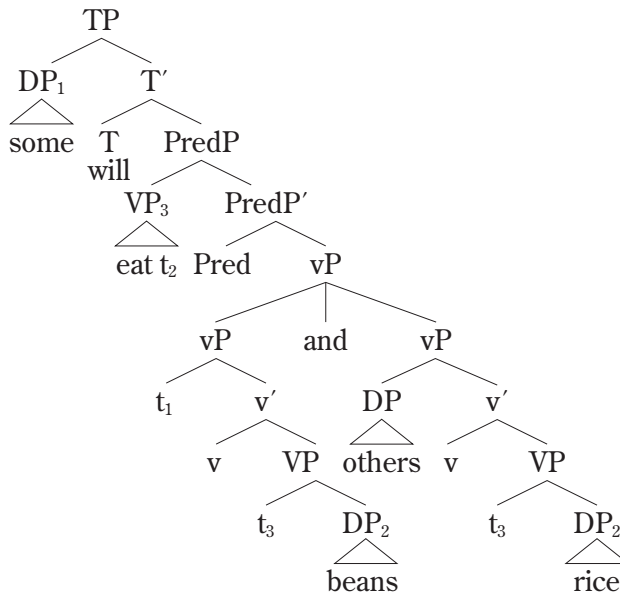
4. Johnson (2009) の全域的移動分析

Johnson (2009) は, 空所化を移動操作により派生する分析を提案している。この分析によると, (50) の空所化は (51) の構造を持つ。

(42) 省略文に課せられる制限に関する考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から (島)

(50) Some will eat beans and others rice.

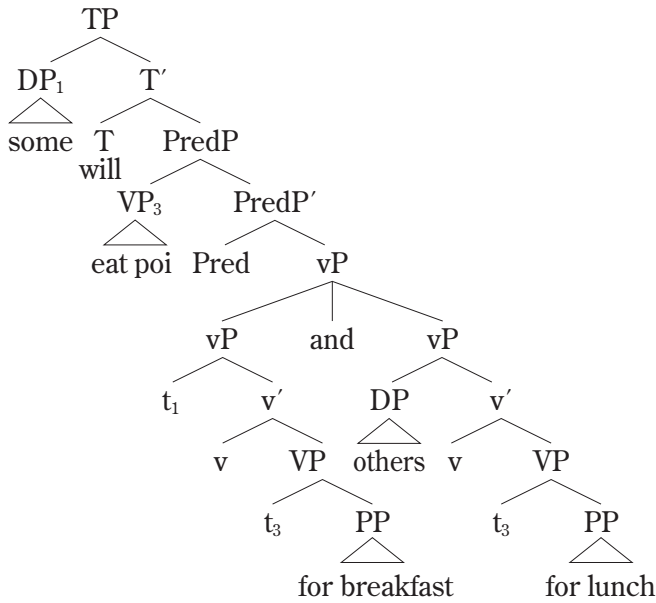
(51)



構造 (51) において、等位接続詞 *and* は動詞句 vP を連結し、それぞれの等位項内で目的語 DP₂ が VP に付加移動する。目的語の痕跡と動詞 *eat* を含む動詞句 VP₃ が移動操作の全域的適用によりそれぞれの等位項内から述語を認可する機能範疇投射 PredP の指定部に繰り上がる。更に、TP 指定部には、第一等位項の主語である *some* が移動する。これらの移動操作の結果、(50) の語順が派生する。また、この分析によると、(52) の空所化の構造は (53) である。

(52) Some will eat poi for breakfast and others for lunch.

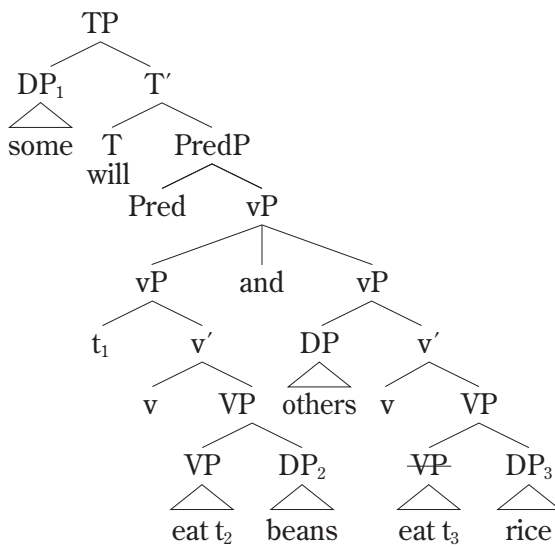
(53)



構造 (53) では、動詞とその目的語を含む動詞句がそれぞれの等位項内から PredP 指定部へ全域的に移動している。

Johnson の分析では、(50) の空所化が次の構造を持つことは許されない。

(54)



(44) 省略文に課せられる制限に関する考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から (島)

この構造では、第二等位項内の動詞句が削除されているが、PredP 指定部に述語が存在しないために許されない。仮に、第一等位項の動詞句が PredP 指定部に移動した場合、この移動操作は等位構造制約に違反する。従って、(54)に示される削除操作は許されず、空所化は移動操作の全域的適用により派生する。

Johnson が提案する空所化の分析の下では、空所化を受ける動詞とその先行詞は全域的適用により PredP 指定部に移動するため、空所化を受ける動詞を含む vP とその先行詞を含む vP は等位構造を形成しなければならない。その結果、この分析によると、空所化は従属節内において適用できないことになり、空所化文が従属節内に生起できない事実を説明できる。更に、Johnson の分析によると、次の空所化は許されない。

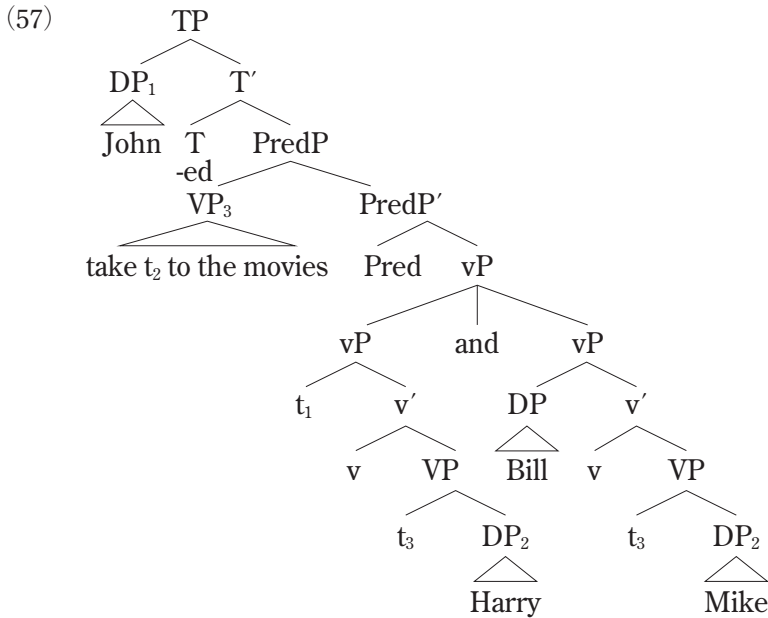
(55) * [She's said Peter has eaten his peas], and [Sally _ her green beans], so now
we can have dessert. (Johnson (2009 : 300))

この非文では、接続詞 and が she's said Peter has eaten his peas と Sally her green beans を結びつけているため、空所化を受けた eaten を含む vP と空所化の先行詞を含む vP は等位項ではない。その結果、eaten を全域的適用により PredP 指定部に移動できない。このように、Johnson の分析は、(55) の非文を排除できる。

しかし、この分析には経験的問題と理論的問題がある。まず、経験的な問題としては、次のような空所化文を派生できない。

(56) John took Harry to the movies, and Bill Mike. (Sag (1976 : 218))

この文の第二等位項では、動詞 took と前置詞句 to the movies が空所化を受けている。Johnson の分析の下では、動詞と前置詞句を含む VP が全域的適用により PredP 指定部に移動することになる。



この構造では、それぞれの等位項内において動詞 take の目的語 DP₂ が VP に付加移動し、その後、動詞 take、痕跡 t₂、前置詞句 to the movies を含む VP₃ が PredP 指定部に全域的に移動している。この結果、次の誤った語順が派生される。

(58) *John took to the movies Harry, and Bill Mike.

従って、Johnshon の分析は、(56) の空所化文を派生できない。

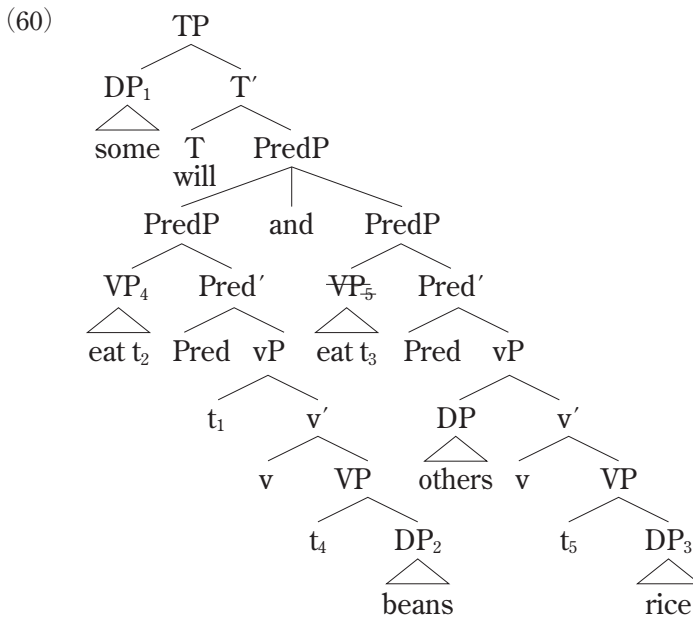
他方、本論の分析によると、(56) の構造としては次の二つが考えられる。

- (59) a. [CP [TP John took Harry to the movies]] and [CP Bill [C· Mike [C· C<C-F> [e]]]]
- b. [TP John₁ [vP t₁ took Hary to the movies] and [vP Bill [v· Mike [v· v<C-F> [e]]]]]

構造 (59a) では、等位接続詞 and が CP を連結し、第二等位項である CP の主要部にコピー素性が生起する。一方、(59b) では、and が vP を連結し、第二等位項である vP の

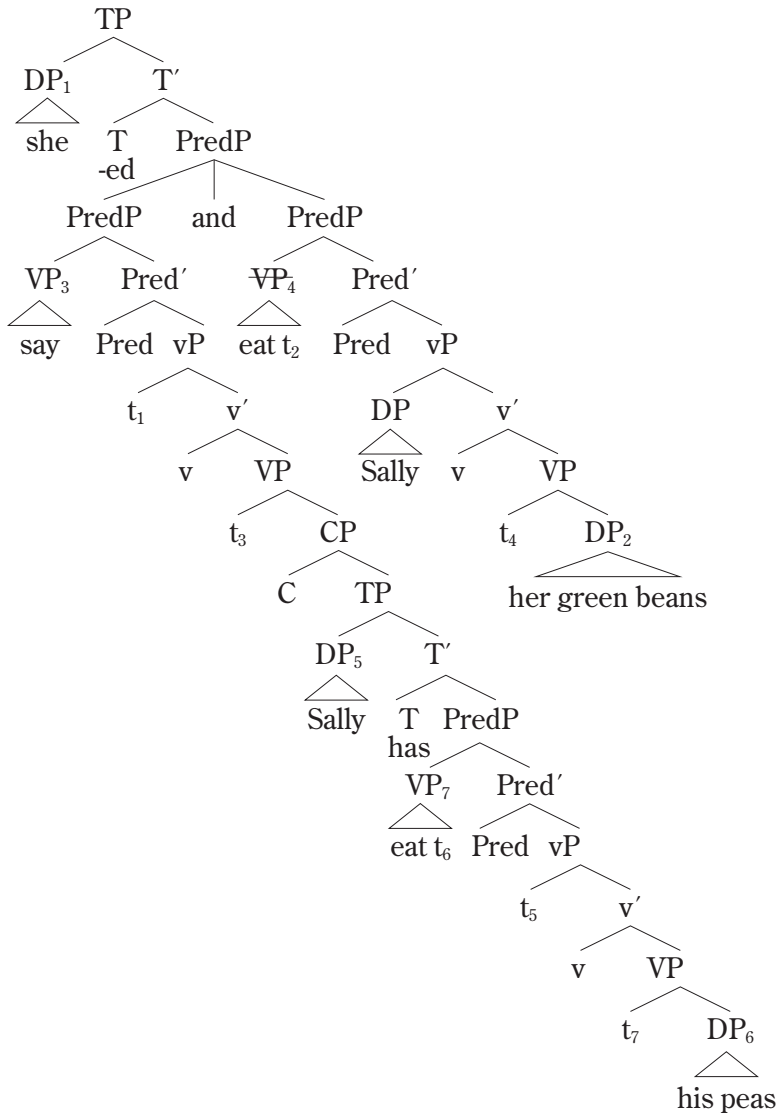
主要部にコピー素性が生起する。何れの構造においても、Bill と Mike が John と Harry にそれぞれ対比されることにより、先行詞文内の John と Harry を変項 x と y に変えた x took y to the movies が空所スロットにコピーされる。その結果、(56) の文法性が説明される。

次に、理論的問題に移ろう。Johnson の分析では、vP が等位構造を形成することが前提になっているが、PredP が等位構造を形成していけない理由はない。³ 仮に、PredP が等位構造を形成すると考えると、Johnson の分析は (50) の空所化文に次の構造を与える。



この構造では、それぞれの等位項内で VP が PredP 指定部に移動し、第二等位項内の VP が移動先で削除されている。このような構造が Johnson の分析の下で許される場合、この分析は (55) の非文の理由を説明できない。すなわち、等位接続詞 and が PredP を等位項とする場合、(55) は次の構造を持つ。

(61)



この構造では、第二等位項内において動詞句 VP₄ が PredP 指定部に移動し、移動先で削除を受けている。この先行詞は、第一等位項内における埋め込み節内の PredP 指定部に移動した VP₇ である。この派生はいかなる条件にも違反していないので、その出力である (55) は文法的な文であると誤って予測される。

では、本論の分析の下で、(55) がどのように説明されるのかを考えてみよう。本論の分析によると、(55) は次の二つの構造を持ちうる。

- (62) a. [_{CP} [_{TP} She's said Peter has eaten his peas]] and [_{CP} Sally [_C her green beans [_C C <C-F> [e]]]]
b. [_{TP} She₁'s [_{VP} t₁ said Peter has eaten his peas] and [_{VP} Sally [_V her green beans [_V v <C-F> [e]]]]]

構造 (62a) では、等位接続詞 and が CP を連結し、第二等位項の CP 主要部にコピー素性が生起する。他方、(62b) では、and が vP を連結し、第二等位項の vP 主要部にコピー素性が生起する。何れの構造においても、Sally と構造上の並行関係にあるのは、主節の主語である She であり、従属節の主語である Peter ではない。そのため、Sally と her green beans を Peter と his peas にそれぞれ対比させ、第一等位項内の Peter と his peas を変項 x と y に置き換えた x has eaten y を空所スロットにコピーすることはできない。従って、(55) の空所箇所を has eaten と解釈することができない。

以上、本節では、Johnson が提案する空所化の移動分析に関する問題点を指摘し、Johnson が観察する空所化に関する事実は、空所化文を LF コピーにより派生させる本論の分析の下でも説明されることを論じた。

5. ま と め

本稿では、動詞句省略文を PF 削除操作により、また、擬似空所化文と空所化文を LF コピー操作により派生させる分析を提案することにより、これらの省略文に課せられる次の三つの制限が統一的に説明できることを論じた。まず、動詞句省略と擬似空所化は、主節動詞の目的語である that 節や副詞節などの従属節内で適用できるが、空所化は適用できない。また、従属節内に生起する動詞句省略文は先行詞文に先行できるが、同じ環境に生起する擬似空所化文は先行詞文に先行できない。更に、動詞句省略と空所化は主節動詞とその目的語である that 節を含む複文を先行詞に取るができるが、擬似空所化はできない。省略文に課せられるこれらの制限は Johnson (2009) の分析の下では説明できず、本稿が提案する分析の経験的妥当性を示すと考えられる。

注

* James Tink 氏と Max Phillips 氏には例文の判断でお世話になった。ここに記して感謝の意を申し上げる。尚、本稿の一部は日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究（C）課題番号 25370542）の援助を受けている。

1. (17b) では補文標識 *that* が生起するが、生起しない場合は次の構造を持つ。
 - (i)* Some had eaten mussels and she claims [_{CP} others [_C shrimp C<C-F> [e]]]
 この構造では、動詞 *claim* が補部に CP を選択している。この構造が許されない理由は、次の文が許されない理由と同じであると考えられる。
 - (ii)* Mary claims [_{CP} John₁ (that) [_{TP} Jane loves t₁]]
2. 何故 (31) の文は完全に容認されないのかという問題については、今後の課題とする。
3. この問題については、Johnson (2009, 310p, footnote 16) で指摘されている。

参 考 文 献

- Agbayani, Brian and Ed Zoerner (2004) "Gapping, Pseudogapping, and Sideward Movement," *Studia Linguistica* 58, 185-211.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries : The Framework," *Step by Step : Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale : A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Culicover, Peter W, and Ray S. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Hankamer, Jorge (1979) *Deletion in Coordinate Structures*, Garland, New York.
- Hudson, Richard A. (1976) "Conjunction Reduction, Gapping and Right-Node Raising," *Language* 52, 535-562.
- Jackendoff, Ray S. (1971) "Gapping and Related Rules," *Linguistic Inquiry* 2, 21-36.
- Johnson, Kyle (2001) "What VP Ellipsis Can Do, and What it Can't, but not Why," *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by Mark Baltin and Chris Collins, 439-479, Blackwell Publishing, MA.
- Johnson, Kyle (2009) "Gapping Is Not (VP-) Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 40, 289-328.
- Kuno, Susumu (1976) "Gapping : A Functional Analysis," *Linguistic Inquiry* 7, 300-318.
- Koutsoudas, Andreas (1971) "Gapping, Conjunction Reduction, and Coordinate Deletion," *Foundations of Language* 7, 337-386.
- Lappin, Shalom (1996) "The Interpretation of Ellipsis," *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, ed. by Shalom Lappin, 145-175, Blackwell, Oxford.
- Lasnik, Howard (1999) "On Feature Strength : Three Minimalist Approaches to Overt Movement," *Linguistic Inquiry* 34, 197-217. [Reprinted in *Minimalist Investigations in Linguistic Theory*, 2003, 83-102, Routledge, London and New York.]
- Lobeck, Anne C. (1995) *Ellipsis : Functional Heads, Licensing and Identification*, Oxford University Press, Oxford.
- Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence : Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford.
- Neijt, Anneke (1979) *Gapping : A Contribution to Sentence Grammar*, Foris, Dordrecht.

(50) 省略文に課せられる制限に関する考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から (島)

Sag, Ivan (1976) *Deletion and Logical Form*, Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York and London, 1980]

Steedman, Mark J. (1990) "Gapping as Constituent Coordination," *Linguistics and Philosophy* 13, 207-263.

島 越郎 (2010) 「LF コピーと PF 削除による省略文の分析」*JELS 27: Papers from the 27th Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 227-235.

Deriving Restrictions on Ellipses from Copying and Deletion

Etsuro SHIMA

The purpose of this paper is to consider restrictions on three elliptical sentences in English which are called VP-ellipsis, Gapping and Pseudogapping. These sentences display different behavior. First, VP-ellipsis and Pseudogapping can appear in embedded clauses, whereas Gapping cannot. Second, Pseudogapping degrades considerably in fronted adverbials, relative to VP-ellipsis. Third, VP-ellipsis and Gapping can affect a string that reaches into a finite clause, whereas Pseudogapping cannot. I will account for these properties by assuming two types of approach to generate appropriate meanings for ellipsis: copying and deletion. Copying is the process that forms an appropriate semantic structure from a surface representation involving an empty slot by copying into the slot the linguistic material necessary to insure interpretation. Deletion is the process that derives a surface structure by deleting constituents under identity with other linguistic material. I will propose that Pseudogapping and Gapping result from copying, whereas VP-ellipsis is derived by deletion. My proposal provides a unified account of different restrictions on the three ellipses.